

第 17 章 ワイルド受容研究

ワイルド受容研究を扱ったものは、いわゆる「書誌」としてまとめたものと文献の調査をもとにした受容研究がある。先に『書誌から見た日本ワイルド受容研究(明治編)』(イーコン、2006年11月)で、明治時代におけるワイルド受容をある程度明らかにして来たが、ここではさらに新しい資料を加え、「(1) ワイルド書誌」と大正時代のワイルド受容研究を中心とした「(2) ワイルド受容研究」とに大別して取り上げていきたい。

(1) ワイルド書誌

作家や芸術家がどのように研究されてきたかはいわゆる個人書誌を見ればはっきりする。ワイルドについてはワイルド書誌を見れば明らかとなる。まず、代表的な外国のワイルド書誌5冊を紹介しておこう。

Mason, Stuart. *Bibliography of Oscar Wilde*. T. Werner Laurie, 1914

Mason, Stuart. *Bibliography of Oscar Wilde*. T. Werner Laurie, 1914.

Mikhail, E. H. *Oscar Wilde: An Annotated Bibliography of Criticism*. Macmillan, 1978.

Small, Ian. *Oscar Wilde Revalued*. ELT Press, 1993.

Mikolyzk, Thomas A. *Oscar Wilde: An Annotated Bibliography*. Greenwood, 1993.

もちろん、これ以外にもカタログも重要な資料である。では日本ではどうであろうか。

大正時代に限らず日本におけるこれまでの「ワイルド書誌」をまとめたものは平井博、井村君江、佐々木隆のワイルド書誌が代表となる。これに先行するものとしては、昭和9年(1934)5月の本間久雄『英国近世唯美主義の研究

究』(東京堂)の「参考書目の事——後記——」として、英語文献を本格的に紹介したものがあつた。この参考書目では Walter Hamilton の *The Aesthetic Movement in England*, Thomes F. Plowman の *The Aesthetes*, Stuart Mason の *Oscar Wilde and The Aesthetic Movement*, Holman Hunt の *Pre-Raphaelitism and The Pre-Raphaelite Brotherhood* (2 vols.)等が紹介されている。本間は単に著者、書名だけを整理したのではなく、コメントを加えたことで、充実度は増している。本間は昭和3年(1928)よりヨーロッパ留学中にスチュアート・メイソンが編集した新聞・雑誌の切抜帖やワイルド自筆書簡を含む貴重な文献を入手し、現在は本間コレクションとして、実践女子大学図書館に所蔵されている。経緯については、昭和4年(1929)12月の本間久雄『滞欧印象記』(東京堂)の「ワイルド研究資料蒐集について」に記されている。ワイルドの英語文献をまとめたものとしては、昭和29年(1954)3月の平井博「Bibliography of the Reference Books on Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第5集)もある。平井はその「はしがき」の中で次のように述べている。

日本に居て外国文学を研究するということが如何に労多くして功少いものであるかはそれをやつて見るまでは解らない。外国の作家の作品を二つ三つ読んで、「やれ“ふつくらした描写”だとか“あたたかい感じ”だとかいった様ば座布団の批評の様な」無意味な言葉を吐く事なら事は簡単だ。しかし作家にしる作品にしる本場の水準に追いついた研究なり調査なりをふまえて、権威のあることをいうことは容易ならぬ事である。

第一自分の研究対象としている事がその本国でどの程度まで研究済であるかという、その足跡を見きわめて、自分がそこまで達する事だつて先づ大事業である。私が Oscar Wilde の研究を始めて20年以上になるがやつと最近おぼろげながら過去の人々の研究に追いついたという所で、自分の研究はやつとこれから始まる所である。⁽¹⁾

日本語の文献は 11 冊が取り上げられているに過ぎない。いずれも大正・昭和に入ってからの文献である。著者、書名、出版社、出版年のみを掲載順で紹介すると以下の通りである。

- 深沢正策『オスカー・ワイルド その人と時代』万里閣、1951 年
本間久雄『唯美主義者オスカー・ワイルド』春秋社、1923 年
本間久雄『滞欧印象記』東京堂、1929 年
本間久雄『英国近世唯美主義の研究』東京堂、1934 年
益田道三『近代唯美思潮研究』昭森社、1941 年
大塚保治『文芸思潮論』岩波書店、1930 年
大塚宣也訳／H. ジャクソン『近代英吉利文学論』肇書房、1942 年
高橋泰『O. W. 』研究社、1935 年
和気律次郎訳『オスカー・ワイルド』春陽堂、1913 年
矢野峰人『近代文学史』第一書房、1929 年
矢野峰人『近英文芸批評史』全国書房、1943 年

全体の文献数 154 のうち、日本語文献はこの 11 冊だけである。平井は「あとがき」に以下のように記している。

私はこの参考文献に並行して明治末期から第二次大戦前までの日本に於ける Oscar Wilde の紹介、研究、翻訳、翻刻書の書誌を編集する目的で多数の資料を蒐集していたが、その一切は今度の戦災で家屋、家財と共に焼失してしまった。幸にそれを簡単に記録したカードのみが危く焼失からまぬかれたので機会があれば発表するつもりである。それによれば、明治、大正にかけて Wilde が日本に移植され育つて行つた様を年代順に明らかにする事が出来ると思う。それは雑誌の論文に到るまで網羅しているから多数の紙幅を要するので今回は割愛せざるを得なかつたのである。⁽²⁾

この Bibliography は昭和 35 年(1960)4 月に発表された『オスカー・ワイルドの生涯』(松柏社)に所収されている。

実質的な意味での「ワイルド書誌」は、昭和 37 年(1962)3 月の平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(その 1)」(『福島大学学芸学部論集』第 13 集の 2[人文科学])、昭和 38 年(1963)3 月の平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(其二)」(『福島大学学芸学部論集』第 14 集の 2[人文科学])として発表され、その後、昭和 55 年(1980)7 月の『オスカー・ワイルド一考』(松柏社)に所収されたワイルド書誌である。平井は「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(その 1)」の「はしがき」で次のように述べている。

ワイルド研究の一端として日本に於けるワイルドの書誌を編集しておき度いという事は私の念願であった。外国の文学をただ単に外国の文学として眺めるのではなく、それが日本の文学に如何なる経路を通り輸入され、どの様に消化され、更にどんな影響を及ぼしているのかを知る事は外国文学研究者にとっては見落とす事の出来ない研究要素であるからである。⁽³⁾

平井は明治・大正時代のワイルド書誌を発表した。特にコメントを加えたことでその書誌情報はかなり充実したものとなっている。前述の本間の「参考書目」と形式が同じであるが、本間は洋書、平井は和書の書誌である。平井は後年、オスカー・ワイルドの研究で文学博士の学位を取得しているが、その時の論文の審査は本間久雄が務めている。

本間、平井のあと、明治から大正にかけての日本におけるワイルド書誌をまとめたものは昭和 51 年(1976)3 月の井村君江「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌」(『鶴見大学紀要』第 2 部、外国語・外国文学編、第 13 号)がある。この書誌は年表形式になっており、さらに、平井の「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(その 1)」「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(其二)」にもない文献も収録されている。

書誌によりワイルド研究の客観的な傾向を掴むことができる。受容史研究と書誌は連動するものであり、本間久雄、平井博、井村君江の3人がこの分野の先駆者であることは言うまでもないことである。本間は「ワイルド書誌」という形式ではまとめてはいないが、受容史に関する論文で日本のワイルド受容の原点を明らかにするなど、「日本のワイルド研究」には欠かせない存在である。「ワイルド書誌」の原点は、ワイルドの参考文献・参考書目から始まっている。ワイルドの周辺にまで目を向けて見ると、以下のものがよい参考となろう。

本間久雄「参考書目の事」(『英国近世唯美主義の研究』東京堂、1934年5月)

平井博「Bibliography of the Reference Books on Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第5集、1954年3月)

平井博「参考文献書誌」(『オスカー・ワイルドの生涯』松柏社、1960年4月)

平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(その1)」(『福島大学学芸学部論集』人文科学、第13集の2、1962年3月)

平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌(其二)」(『福島大学学芸学部論集』人文科学、第14集の2、1963年3月)

井村君江「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌」(『鶴見大学紀要』第2部、外国語・外国文学編、第13号、1976年3月)

平井博「日本におけるOscar Wilde書誌」(『オスカー・ワイルド考』松柏社、1980年7月)

須永朝彦「泰西少年愛、同性愛文献一覧」(須永朝彦／南條竹則訳『泰西少年愛読本』新書館、1989年4月)

実践女子大学図書館編『実践女子大学図書館所蔵 オスカー・ワイルド文献目録』実践女子大学図書館、1989年11月)

井村君江「日本における『サロメ』書誌<明治・大正時代>」(『「サロメ」

の変容—翻訳・舞台』新書館、1990年4月)

及川和夫「イギリス世紀末関係書誌」(出口保夫編『世紀末のイギリス』
研究社、1996年1月)

川戸道昭、榊原貴教編「明治翻訳文学年表 ワイルド編」(『ワイルド集』
明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》第10巻、大空社、1996年10月)

佐々木隆「オスカー・ワイルド書誌」(山田勝編『オスカー・ワイルド事
典』北星堂書店、1997年10月)

永山多貴子編「ラファエル前派関連年表」/五十嵐卓編「参考文献」(ニュー
ーアル、河村錠一郎監修『ラフェエル前派展カタログ』(アルティス、
2000年4月)

川戸道昭、中林良雄、榊原貴教編『大正期翻訳文学画像集成』(第6巻)(ワ
イルド集)(ナダ出版センター、2003年)(CD-ROM)

佐々木隆『日本ワイルド総覧』(イーコン、2007年2月)

「日本ワイルド書誌」という観点から見れば、昭和51年(1976)3月の井村
君江「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌」、昭和55年(1980)7月の平井
博「日本における Oscar Wilde 書誌」のふたつが戦前までのものをまとめた
代表的なものである。このふたつの書誌を基に、新しい文献を加え、単行本
を中心にしてまとめたものが平成9年(1997)10月の佐々木隆「オスカー・ワ
イルド書誌」である。さらに単行本、定期刊行物、翻訳、上演年表等、平成
18年(2006年)3月までのものをまとめた平成19年(2007)2月の佐々木隆
『日本ワイルド総覧』(イーコン)も出版されている。『日本ワイルド総覧』
の掲載内容は以下の通りである。

- 1 単行本編
- 2 定期刊行物・雑誌編
- 3 『会報』『WILDE NEWSLETTER』・『オスカー・ワイルド研究』
- 4 翻案・翻訳編

- 5 訳注・注釈編
- 6 日本ワイルド協会の活動記録
- 7 ワイルド劇上演記録
- 8 ワイルド・ウェブサイト
- 9 日本におけるワイルド受容年表

世界で最初に設立されたワイルドの専門学会である「日本ワイルド協会の活動記録」やインターネットを意識した「ワイルド・ウェブサイト」も取り上げられている。本書については日本オスカー・ワイルド協会顧問・理事の富士川義之は『オスカー・ワイルド研究』（第8号）（2007年3月）の中で、

日本のワイルド研究やワイルド協会の歴史を振り返るときに、この総覧は良い手引きとなるに違いない⁽⁴⁾

と、述べている。今後増補され、「ワイルド映像」「ワイルドCD」なども取り上げられる予定である。（2008年2月刊行予定である）

最近の傾向としては、上演の記録をまとめた上演年表なども整備されつつあることだ。しかし、『サロメ』上演に限定されることが多いのが現状である。これは、ワイルド劇の中でオペラを含めて『サロメ』が最も多く上演されていることに起因している。上演の記録としては、

井村君江「戦後の主な『サロメ』上演一覧」（『「サロメ」の変容—翻訳・舞台』新書館、1990年4月）

佐々木隆「オスカー・ワイルド書誌 F. 上演記録」（山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月）

堀江珠喜「サロメ年表」（『ワイルドとホームズとサロメのレビューの世界』北宋社、2000年8月）

佐々木隆「ワイルド劇上演記録」（『日本ワイルド総覧』イーコン、2007

年 2 月)

などがある。佐々木隆「オスカー・ワイルド書誌 F. 上演記録」は『サロメ』以外の上演にも目を向けた「ワイルド劇上演記録」となっている。前述の通りまとまったワイルド劇上演記録は『日本ワイルド総覧』に掲載されている。外国と日本の「ワイルド書誌」の最近の傾向については、佐々木隆「ワイルド書誌について」(『英語青年』第 146 巻第 11 号、2001 年 2 月)で簡潔にまとめられている。

また、明治期及び大正期の翻訳を収載した平成 15 年(2003)の『大正期翻訳文学画像集成』(第 6 巻)(ワイルド集)(ナダ出版センター)には翻訳及び注釈本の詳細な書誌及びデジタル化された資料が掲載されている。

(2) ワイルド受容研究

これまでのワイルド受容研究に関しては、その内容から 2 つに大別することができよう。第 1 に大正時代におけるワイルド受容を全般的に扱ったもの。第 2 に大正時代におけるワイルド受容を部分的に扱ったものだ。

第 1 の大正時代におけるワイルド受容を全般的に扱ったものについては、平成 13 年(2001)6 月の佐々木隆「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第 15 輯)が上げられよう。また、昭和 35 年(1960)5 月の井村君江「日本におけるワイルド(一)」(『古酒』第 3 冊、新樹社)、8 月に「日本におけるワイルド(二)」(『古酒』第 4 冊、新樹社)⁽⁵⁾も発表しているが、この 2 つは「芥川龍之介」「佐藤春夫」が中心になっている。

第 2 の大正時代におけるワイルド受容を部分的に扱ったものについては、まず初期の受容を扱ったものとしては以下のものが上げられよう。

本間久雄「オスカア・ワイルドと日本」(『文学』第 2 巻第 1 号、岩波書店、1934 年 1 月)

平井博「日本における Oscar Wilde」(『福島大学学芸学部論集』第 2 分冊、

第 17 号、1965 年 2 月)

これらの論文は *Japan Punch* におけるワイルドへの言及や増田藤之助抄訳「美術の個人主義」に注目したものだ。後年、昭和 9 年(1934)5 月の本間久雄『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)、昭和 55 年 7 月の平井博『オスカー・ワイルド考』(松柏社)にそれぞれ収録された。*The Soul of Man under Socialism* の受容史を扱った平成 17 年(2005)10 月の佐々木隆「書誌から見たワイルド受容の原点——『社会主義下の人間の魂』受容——」(『比較文化史研究』第 7 号、比較文化史学会)、*De Profundis* の波動については、島崎藤村や夏目漱石について注目した一連の井村君江の研究には以下のものがある。

「わが国における『獄中記』の波動——第一部」(『鶴見女子大学紀要』第 4 号、1967 年 2 月)

「夏目漱石とオスカー・ワイルド——日本に於ける『獄中記』の波動——その二——」(『鶴見女子大学紀要』第 5 号、1968 年 3 月)

「島崎藤村とオスカー・ワイルド——わが国に於ける『獄中記』の波動——第三部——」(『鶴見女子大学紀要』第 6 号、1968 年 12 月)

井村はさらに日本における *Salome* の受容においても重要な研究を発表している。

「日本に於ける『サロメ』——明治及び大正時代」(『鶴見大学』第 2 部、外国語・外国語文学編、第 11 号、1974 年 3 月)

『「サロメ」の変容——翻訳・舞台』(新書館、1990 年 4 月)

また、平成 3 年(1991)に東京で開催された The International Comparative Literature Association の大会では‘Salome in Japan——A Drama of Desire’なども発表していることも付け加えておきたい。

他に日本における *Salome* 受容研究について注目した研究としては、昭和 58 年(1983)3 月の山本澄子『『サロメ』移入考』(『立正大学人文科学研究所年報』別冊第 4 号)、平成 13 年(2001)9 月の Sato Miki and Higashi Yoichi “A Comparative Study of Salome: On the Transfer of ‘Mood’ from the Original English Version to the Japanese Translation” (『北海道教育大学紀要』人文科学・社会科学編、第 52 巻第 1 号)、平成 15 年(2003)6 月の佐藤美希「文化による『サロメ』の受容—日本での受容をめぐって」(『北海道英語英文学』第 48 号、日本英文学会北海道支部)もある。また、*Vera* の受容を扱った平成 14 年(2002)3 月の小泉朝子「オスカー・ワイルドの『ヴェラ』—イギリスと日本における作品受容と社会的背景—」(『比較文学』第 44 巻、日本比較文学会)などもある。また、*The Happy Prince* について平成 16 年 3 月の増満圭子「翻案童話『つばめと王子』に見られる有島武郎の子供観—原作オスカー・ワイルド『幸福な王子』との異同を中心に—」(『有島竹郎研究』第 7 号、有島竹郎研究会)、平成 16 年(2004)3 月の佐藤美希「日本語翻訳における *foreignization* と *domestication* のストラテジー: オスカー・ワイルドの作品翻訳をめぐって」(『国際広報メディアジャーナル』第 2 号、北海道大学国際広報メディア研究科)、平成 16 年(2004)11 月の榊原貴教「ワイルドに見る翻訳社会史—『幸福の王子』と戦後日本の児童文学」(『翻訳と歴史』第 24 号、ナダ出版センター)、平成 17 年(2005)3 月 林修典「子どものための文芸作品のキリスト教的要素—『幸福な王子』の日本での紹介例」(『キリスト教文化研究所年報』第 27 号、ノートルダム清心女子大学)などもある。

また、清水義和の一連の研究も紹介しておきたい。

「日本に於ける唯美主義移入考—坪内逍遙と島村抱月の弟子—本間久雄」(『愛知学院大学教養部紀要』第 45 巻第 4 号、1998 年 3 月)

「日本に於ける近代批評研究移入考—ウォルター・ペイターからオスカー・ワイルドへ—本間久雄の『明治文学史』を巡って」(『愛知学

院大学教養部紀要』第 46 巻第 1 号、1998 年 7 月)

「日本に於けるショー・シェークスピア・ワイルド移入研究——市川又彦、坪内士行、本間久雄の著作目録・その他」(『愛知学院大学教養部紀要』第 46 巻第 2 号、1998 年 11 月)

清水は上記の論文をまとめ、1999 年 3 月には『ショー・シェークスピア・ワイルド移入史』(文化書房博文社)を發表している。清水は本間久雄のワイルド受容研究を中心に扱ったのである。

岡崎一は『趣味』『六合雑誌』を通して明治・大正時代におけるワイルド受容の側面を扱ったものや、文芸関係以外の分野におけるワイルドの受容状況を扱った研究論文を發表している。

「日本における Oscar Wilde (1)——『趣味』誌上のワイルド——」(『Random』第 15 号、東京地国語大学大学院英語英文学研究会、1989 年 7 月)

「日本における Oscar Wilde(3)——『六合雑誌』の場合 (1)」(『Random』第 15 号、東京地国語大学大学院英語英文学研究会、1992 年 9 月)

「日本における Oscar Wilde(4)——『六合雑誌』の場合 (2)」(『Random』第 19 号、東京地国語大学大学院英語英文学研究会、1994 年 9 月)

最後に日本におけるワイルド研究を集大成したとも言うべき平成 9 年(1997)10 月の山田勝編『オスカー・ワイルド事典』(北星堂書店)、「第 2 部 オスカー・ワイルドと日本」を紹介しておきたい。ここでは、以下の項目が取り扱われている。

明治期のワイルド

ワイルドと大正文学*

ワイルドと現代文学

ワイルドと日本演劇*

ワイルドと日本児童文学*

ワイルド全集*

森鷗外

大塚保治*

島村抱月*

島崎藤村*

岩野泡鳴

志賀直哉*

谷崎潤一郎*

本間久雄*

日夏耿之介*

芥川龍之介*

佐藤春夫*

福田恆存

三島由紀夫

特に*印については、大正期におけるワイルド受容を考える上で特に注目すべきであろう。受容研究にしろ、比較文学的な研究にしろ、基礎資料があればこそ成立するものである。世界の中のワイルド研究から見れば、日本人独自のワイルド研究ということになるものと信じる。

日本におけるワイルド受容研究はようやくその基礎となるワイルド書誌が整備されつつあるところまで来た。すでに各論とも言える比較文学的研究はかなり進んでいる。まさに、日本独自のワイルド受容の様相はこうしたところの現れているかもしれない。ワイルド劇上演が『サロメ』に集中している

こと、また、上演の回数も少ないことから、上演論がまだ十分に展開できていないことも課題として残されている。ようやく日本でも山田勝編『オスカー・ワイルド事典』（北星堂書店、1997年10月）が出版され10年が経過した。今後は更なる研究が期待される。

参考資料

井村君江「日本におけるオスカー・ワイルド——移入期（第1部）」（『鶴見女子大学紀要』第7号、鶴見女子大学、1969年12月）

山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月

佐々木隆「大正時代のワイルド受容」（『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、武蔵野短期大学、2001年6月）

佐々木隆『書誌から見た日本ワイルド受容研究（明治編）』イーコン、2006年11月

佐々木隆『日本ワイルド総覧』イーコン、2007年2月

注

(1) 平井博「Bibliography of the Reference Books on Oscar Wilde」（『福島大学学芸学部論集』第5集、1954年3月）、p.15.

(2) Ibid., p.25.

(3) 平井博「日本に於けるオスカー・ワイルド書誌（その1）」（『福島大学学芸学部論集』第13集の2[人文科学]、1962年3月）、p.59.

(4) 『オスカー・ワイルド協会』（第8号、日本ワイルド協会、2007年3月）より。

(5) 2つの論文の著者名は福田君江であるが、これは井村君江の旧姓である。